

月券 林寺報

いろいろな方に迷惑をかけて出掛けたのだから、お詫びのしるしにも見聞報告を書かねばなりません。

アメリカ一ヶ月紀行

老院



サンフランシスコの北、学園都市パークレーに隣接した、湾に望む小都市エルサリートという町。長男一家の住居があり、その家事手伝いに行ってきました。観光ではなかったので、私の日常生活のごく限られた範囲のものしか見ていません。

この町は、背後の300㍍の山並みから氣にサンフランシスコ湾に向かってなだれ落ちる傾斜面につくられた風光明媚な都市です。せいせい百年ぐらい歴史しかもついていないにも関わらず、この町の人は、自然を大切に、自然を守ってそのなかで暮らしています、

縦横の街路にはそれぞれにさまざまな街路樹が道を覆っています。山のうえ森のなかに分け入ってそこに瀟洒な住宅を建てて暮らしています。木を切り開き土地を拓くという感覚ではなく、自然のなかに分け入って…と言ふふうに見えます。

だから大木が街路の舗装を持ち上げても、それにさからわず舗装をやり直します。多少道路に小さな坂ができても厭いません。

どの家も、例外なくそれぞれにガーデンをもち、思い思いの木や花を楽しんでいます。わたしは毎朝二時間ばかりの散歩をしますが、この町に来て今まで経験したことのなかつた自然を歩く歓びを感じました。

鹿やリスにも出会います。野鳥の声が降ります。歩いているといつもお念佛が出て来ます。

親鸞さまのお書物のなかに、如来さまのはたらきを「一乗海」(どんな川の水も海に流れれば同じ味。如来様の慈悲はいつでもどこでも。だれでもおさめ取つてくださる)

と名付け、その章の中でまた、「また大地(自然)のことし、三世十方一切の如来を出生するがゆえに」(自然の中から沢山の如来さまが出てきてくださって私を呼んでくださっている)

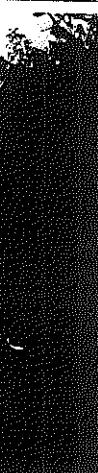
「また大地のことし。一切の往生をたもうがゆえに」(大地自然はすべてのものの命の再生を保障してくださっている)

この親鸞さまの教えがこころに響いて参りました。

散歩していく気づいたことは、道で行き交う人は、必ず笑顔でありさつを交わします。言葉は解らなくても一気に友達になれます。

ネクタイしめて、格式ばった言葉で、見栄体裁を気にながらの付き合いではありません。だれもがそれぞれの「身の丈」で暮らしているように見えます。例えば、ここも自動車社会で洪水のように車が走っていますが、ピカピカの新車は数少なく、ポンコツ車を寿命一杯修理を重ねて乗っているようです。

私が入った町のレストランには、酒類はありませんでした。懇願してやっと出て来たのはビールの小瓶でした。焼酎なしにはものが喉を通らぬ体質では到底暮らせぬ世界と知りました。



サンフランシスコ湾が
一望に見渡せます



どの家にも芝生の庭があります



アメリカ在住の孫むすめ
西池 由衣(20歳)

六月 水無月 のこよみ

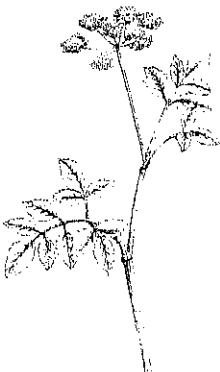
一日	眼科検診
二日	宗学院別科
三日	検診
四日	納骨参拝研修旅 (参加者に要綱配布)
五日	夜久野専福寺永代経 納骨参拝研修旅
六日	行
七日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
八日	教学会議大会
九日	行
十日	夜久野専福寺永代経 納骨参拝研修旅
十一日	行
十二日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
十三日	行
十四日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
十五日	行
十六日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
十七日	行
十八日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
十九日	行
二十日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
二十一日	行
二十二日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
二十三日	行
二十五日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
二十六日	行
二十七日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
二十八日	行
二十九日	夜久野専福寺永代経 教学会議大会(京都)
三十日	行

三十日	別科
一月	別科
二月	別科
三月	別科
四月	別科
五月	別科
六月	別科
七月	別科
八月	別科
九月	別科
十月	別科
十一月	別科
十二月	別科

高福寺永代経	本覚寺永代経
村田三喜男氏宅法事	西方寺永代経
出石組合	西方寺永代経
出石組合	西方寺永代経
出石組合	西方寺永代経

最近

「いのち」に感じたはなし



【その一】

鳥海昭子（歌人）のエッセイ

台所の窓に楓（かえで）の緑がさわやかだつた。食事の後片づけが終わって、予定の時間が余っていた。何か、とっても儲かった気分で、もう一つぐらいの片づけをしたかった。

そうだ。随分長い間ひらいていない床下の収納庫を見てみよう。二つある収納庫の一つには十数年来のさまざまの果実酒が静かに納まっている。あと一方には何が入っているのか判然としない。日頃には用のない台所用具が入つて入るだろう。そう思いながら、方寸の床板を起こした。

あつ。これはなんじゃ……。息を呑んだ。方寸と言つても六十センチ四方いっぱいに、きっちり詰まつたパッキング。紙ではない。布でもない。なかに生めく感じのする巨大な「萌やしの精」か。思い惑うとはこんなことか。胸がドキドキする。

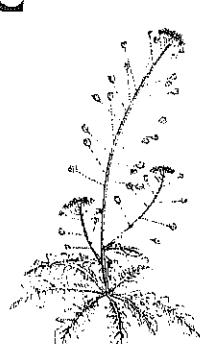
この白い芽をほどいて繋げたらどれくらいの長さになるのだろう。

確かに、誰かに聞いた話だつた。誰か一本の麦の根をピンセットで伸ばして計つたら驚異的な長さだったと。いや、あれとこれを比べてはいけない。その麦は土があり水があり光があつたのだ。この芋の場合、まさに自体の

沙漠の遊牧民に「日本はどんなところですか」と聞かれた時、私はこう答えました。「水道がどこにでも在ります。蛇口をひねれば、いつでも飲み水が出ます」。すると彼らは、「すごい！」と拍手喝采です。続けて「トイレでも水を流しています」と言ふと、「日本人ってバカだ」と言われました。

「援助され大国」

ニッポン



【その二】

国際交流センター所長 羽賀友信さん

私は、このラジヲ放送終了時刻のこととばが大好きである。

十年前、生死をさまよう病床で、このことばを聞いて、とっても救われたのだった。

「あしたの日の出の時刻をお知らせいたします」

日本が食料の大割りを輸入に頼つてることをご存じの方は多いでしょう。すると日本に輸出する農産物を育てるために、大量の水が外国で消費されます。バーチャルウォーターとは、このように間接的に消費される水のことです。

例えば今中国では、黄河の下流域千キロの地帯でほとんど水がなくなり、大問題になっています。農業用水に使われているためです。中央アジアオラル海でも同様なことが起きています。

欠かせない電気。私も今回、震災に遭つて然としたのですが、長岡の中心街でも、電気が断たれてしまえば、即、廃墟となるという事実です。電気がない暗闇の生活。冷蔵庫が役に立たないので食品も火持ちしません。それが電気を作りだすのに石油が使われています。そう見直して見ると、日本はライフラインの殆どを、海外に依存しているのです。

日本こそ「援助され大国」なのです。お金を払つて買ってはいますが、買えないなったときにどうするのだろうと、いつも私は心配しています。

その板状になつた白い芽のしたの芋に恐る恐る手を伸ばした。芋は、私の予感に反してきり空っぽなのである。

身を粉にしてと人は言うが、それを見たことはない。しかし、身を空（ぶら）にして、芋よ、求めめて求めて求め続けた「光り」だったのだねえ。

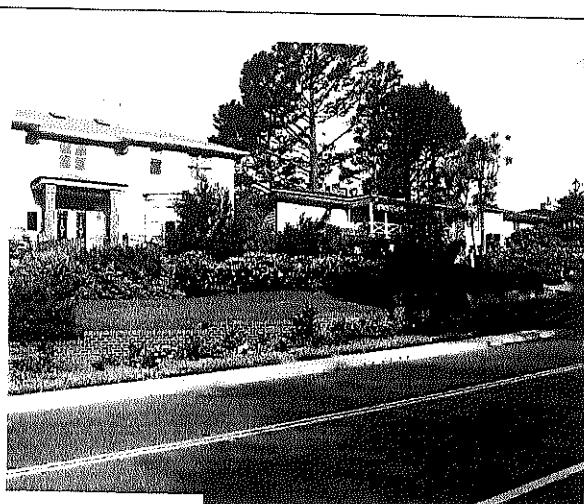
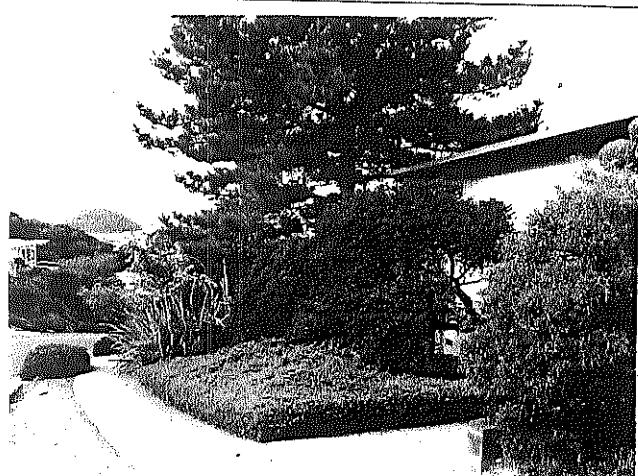
私は、しばし絶句した。

書くことは
考えること生きること
明日の陽の出は六時八分

その日から程なく、台所の窓辺で水と光りを得た芋の切れ端が、赤紫に緑を点じた芽を出した。「いのち」を呼び戻して「モダンダムス」を踊つてゐるようであった。

お待ちいたしておりました。

また都市であろうと山村であろうと生活に



エリザベスの家々にはいろいろ木や花
が植えられています